

日差しが日一日と暖かさを増し、学び舎の木々たちも鮮やかに輝く季節となりました。今日のこの良き日に、私たち19期生が卒業の日を迎えられましたことを大変嬉しく思います。

本日は、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、このような盛大な式典を挙げていただきましたことを、卒業生一同心より感謝申し上げます。

振り返れば4年前、私たちはそれぞれの決意を胸に、この場所で看護の学びをスタートし、これまで多くのことを学んでまいりました。

1年次では、ナイチンゲールの「看護とは、生命力の消耗を最小にするように生活過程を整えること」という言葉から、「人間とは」「健康とは」「生活とは」という問いを持ちながら多面的な視点で、看護の対象となる人間について学び、看護の基礎を築いていきました。

2年次では、より専門的な講義や演習が加わり、対象のからだ・こころの1つ1つの変化に応じて最も良い方法を工夫すること、根拠に基づいてケアすることの大切さを痛感しました。休み時間や放課後に友人たちと採血や点滴などの練習を行い、技術を身に付け、迎えた臨地実習Ⅰでは初めて患者さんを受け持ちました。実際に目の前で変化する対象と向き合い、その変化の意味を捉えて看護することの難しさを感じましたが、友人や先生方からの助言やアドバイスに助けられ、未熟ながらも「看護者としての判断のプロセス」や「対象にとっての看護の意味」を考えながら関わることができました。ケア後の患者さんの安心された表情や「あなたがいてくれてよかった、ありがとう」という言葉に、自分の関わりが看護であったことを認識したと同時に看護の奥深さを感じることができました。

3年次では、半年間にわたり病棟や地域で実習を重ね、様々なライフステージにある方々と関わらせていただきました。臨床の場だからこそ得られる学びを積み重ねていくことで、私たちのそれまでの学びが実感を伴った深い学びとなっていきました。半年間という怒涛の実習で、時に苦しく、思い悩むこともありましたが、共に実習に励む仲間や先生方、離れた場所から見守ってくれる家族の温かさに、心を入れ替え、一看護者として毎日の実習に取り組むことができました。

4年次では、最後の実習がありました。この実習は、主体的に実習領域を決めることから始まり、これまでの総仕上げの自立実習とも言えます。入学時からずっと、いつかは地元で働きたいと思っていた私は、地元である美郷町で実習をしました。病院だけでなく地域に向いてみると、住民を取り巻く様々なサービスや多職種連携を感じるとともに、「家」という生活の場に出向くことで、病院では目にすることができない対象やご家族の姿を五感を使って視ることができました。私は、卒業して地元美郷町で看護師として働きます。限られた環境ではありますが、必要とされていることは何か、自分にできることは何かと常に問いかけながら地域住民と一緒に健康と向き合っていきたいと思います。

4年間の大学生活を振り返ると、まだまだ語り尽くせぬほどに思い出があります。常に皆のリーダーとなって引っ張ってくれたメンバーや、県内の様々な地域に何度も出向き、地域全体を見ながら子どもから高齢者まで幅広い世代の方々の健康づくりについて学びぬいた保健師コースの皆、生命が生まれ育まれる現場で赤ちゃんやお母さん、家族の力に触れ、様々

なことと並行しながら学びぬいた助産師コースの皆、いつも側にいてどんなときも頑張りを認め合い高め合ってきた友人たち、ともに乗り越えてきた19期生でした。こんなにも頼もしく、心から信頼のおける仲間たちと離れることに寂しさはありますが、離れていても同じ看護師として、共に日々奮闘していることを心の片隅に置きながら、1日1日を積み重ねていきたいと思います。

私たちは、看護師として歩み始めたばかりです。私たち19期生の中には、4月から新たな場所で看護師として働き始める人だけでなく、10名余りが進学をし、学びの幅を広げ、深めていきます。それぞれの場所で看護師として多くの人に出会い、悩み、戸惑うこともあるとは思いますが、この場所で学んだ誇りを胸に、新しい職場にいる仲間や先輩方と共にナイチンゲールが灯してくれた看護の道を邁進していきたいと思います。

結びにあたり、今日まで時に厳しく、愛情をこめて指導して下さった先生方や関係職員の皆様、大切な仲間たち、どんな時も心強い味方であり温かく背中を押してくれた家族、そして実習で出会った患者さんやご家族の方々、すべての方々に深く感謝申し上げますとともに、本学の今後の益々のご発展と在校生の皆様のご活躍を心よりお祈りいたしまして、答辞とさせていただきます。

平成31年3月15日

第19回卒業生代表 鴨田 美憂